

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4390101758		
法人名	株式会社 桜会		
事業所名	認知症高齢者グループホーム アクア		
所在地	熊本市南区八分字町22-1		
自己評価作成日	令和2年3月14日	評価結果市町村受理日	令和2年5月1日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和2年3月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症になっても不安や混乱を感じない穏やかな生活の支援、そしてできるだけ自分の足で歩いていただくための支援を第一に考えています。運動機能の低下は日常生活維持および活力に大きな影響を与えます。個々の状態に応じた個別機能訓練を毎日行い、転倒のリスクの高い方にも安易に車いす使用を勧めるようなことはしない介護を実践しています。入院中に車いすを使用していた方が退院後、施設でのリハビリにより以前のように杖での歩行になりました。中庭にはアンツーカーを使用した100mほどの散歩道があり、またやや広めの芝生と家庭菜園のような畑があります。秋にはその畑に近隣の園児が芋の収穫に訪問し、その様子を眺めたり一緒に収穫をし交流を図っています。外出行事も画一的なものではなく、一人一人のまたはご家族の要望に応じた場所にも出かけています。毎日の体操やレクリエーションを楽しんでいただきメリハリのある生活を送っていただいております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

開設当初から庭先やホーム内の手入れが行き届き、専任者を中心とした旬の手作り料理の提供や個々に応じた機能訓練など変わらぬ取組は、入居者に穏やかな時間を提供し、家族の安心にも繋がっている。今年度は入居者の寄せられた一言から、熊本城や馴染みのある神社参拝、自宅での仏壇参りなど個別支援の充実に取り組んでいる。帰園後の入居者の満足の表情は、職員の励みとなり入居者の一言を逃さない寄り添いのケアが介護力を更に高めている。熊本城マラソンのコースになっている幹線道路がすぐ横を走り、毎年参加者への応援が地域交流を兼ねたやホーム行事の一つとなっていたが、今年度は生憎の雨や寒さから沿道での声援は叶わなかったようで、来年は大きな声援を贈ることを今から楽しみにしている。今後も「姿勢の良くなる体操教室」をはじめ、地域の会合場所などに交流室を開放し、人々が気軽に訪問できる環境を作られることが期待される。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	残存能力や歩行能力を一日も長く維持していただけるよう、リスクをとっていく介護、過剰とにならない介護を実践している。必要であれば個別トレーニングも行い能力の維持復帰するよう実践している。	開設時からの法人理念を職員のケア指針としている。入居者の残存能力や歩行能力を維持、向上していくためにあえてリスクを覚悟し、過剰介護とにならないケアを実践している。離職に伴い入職した職員にホームのこれまでの取組や基本的な考え方を伝えている。	新しい職員にとっては過剰介護を理解しながらも、必要以上に入居者に手を貸してしまう事があるとしている。入居者の持てる力を見極め、見守りのケアにより統一した支援を提供する事が期待される。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	・校区主催のスポーツイベントの応援や参加 ・「姿勢の良くなる体操教室」の開催 ・近隣の幼稚園との屋内外の交流 ・地域の行事への協力 ・施設外においても一員として、振舞にも気を配る	地域行事(グランドゴルフ・運動会)の応援や、ささえりあ主催の寸劇をみたり、雨で応援ができなかったものの、恒例となった熊本城マラソンには法人職員が参加している。地元保育園児との交流は継続され、秋の芋ほりは入居者の楽しみとなっている。「姿勢の良くなる体操教室」は開設時より地域交流の柱として週3回開催されている。	今後は、小・中学校のナイスライや体験学習の受け入れなどを地域貢献の一つとして検討いただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	週3回行っている「姿勢の良くなる体操教室」や姿勢セラピストによる「姿勢セミナー」の開催し健康維持に対する啓蒙活動を行っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に一度会議を行い、活動報告を写真を交えながら報告している。参加者は民生委員、自治会長等地域の方や地域包括の方、歯科医など10名ほど参加して頂いている。食事体験や施設内見学を行い評価をいただいている。	会議には包括職員や地域の代表者、協力医である歯科医が参加している。隣接する小規模多機能事業所との合同会議となっており、互いの事業所の状況を把握する機会でもある。2ヶ月毎の経過報告と入居者の様子をスライドで伝え、協力歯科医による高齢者の口腔ケアの重要性についてのミニ講義には、多くの質問があがっている。前回の外部評価結果についても報告を行ない、課題解決に向けた取組が紹介されている。会議に家族の参加がないことから、年間の議事録をまとめて送付し、玄関先に開示している。	地域の各関係機関(者)が参加する会議であり、家族の参加がないことは残念に思われる。今後も引き続き参加を依頼することが望まれる。事故報告や身体拘束についてホームの取組を説明しているが、内容を議事録に残すことが必要と思われる。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	監督官庁である市とは、綿密に連絡を取り合いご指導やご助言をいただいている。	運営推進会議には地域包括センターの職員が毎回参加しており、情報を共有して運営に反映させている。現在は行政に直接出向くことは少なく、メールでの問い合わせやファックスでの事故報告を行ない、研修案内はホームページで収集している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	グループホームの目的や役割を伝え、施錠や拘束をしない方針を理解していただいている。尋ねられた際には丁寧に説明している。	職員の入職時には理念を通し、ホームの取組を伝え、身体拘束の指針をもとに拘束や虐待に対する姿勢を示している。日中の玄関はオープンであり、入居者の中には職員に報告した後、ホーム敷地内を自由に散歩し帰ってこられるなど、行動を制限することなく対応している。年3回ホーム内研修を実施し、言葉遣いについては気になる点があるとして課題と捉えている。センサーマットや人感センサーは使われていない。	指針を玄関などに掲示することで、来訪者への啓発に繋がると思われる。スピーチロックなどの不適切ケアについては課題としており、気づいたことを朝・夕礼などで検討することが期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	勉強会や研修で利用者の権利擁護について学ぶ機会を設けている。そのため、カギをかけない介護、ドラッグロック、スピーチロックなどを行ない介護を基本としている。また、グレーな介護についても自身で考える機会をつくっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	外部研修にて学んでもらうよう努めているが、成年後見人制度に関しての研修も少なく、受講できない職員も多い。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学の時や契約時に丁寧に説明している。疑義についても随時説明している。解約・改定等についても、十分に説明し、契約を締結している		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族が気軽に意見や要望を言っただけのよう普段からコミュニケーションをとっている。申し出があった場合や家族からの喜びの声があった場合にはすぐに全職員に伝達し、反映させている。	毎月のホームだよりは家族が自宅にいて入居者の近況を知る機会として楽しみにされており、外出時の風景や表情、ホームでの普段の様子を発信し、衣替えの依頼や、預かり金の残高などを報告している。ホーム長は家族からの意見や感謝の言葉を申し送りで伝えており、職員の励みとなっている。入居者の要望は普段の関わりの中で確認し、家族に電話したいという思いに対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	勉強会や申し送り時にスタッフの意見や提案を聞く機会を設けている。日頃から意見の言いやすい雰囲気を作り、反映するようしている。	毎月の職員会議で運営全般について検討している。毎朝・夕の申し送りがカンファレンスの機会となっており、排泄が自立された方であっても尊厳に配慮しながら数回に一回は確認して清潔保持に努めることなどが話し合われている。ホーム内は普段から意見を出しやすい環境であり、その都度気づきを出し合い、検討の機会を持っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は長年の介護現場の経験を活かし、各自が向上心を持って働けるような職場づくりに努めており、給与水準や福利厚生の上には特に努力している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修についてはできるだけ平等に受講の機会を設け、研鑽に努めている。また受講者に社内研修を行ってもらい外部研修に参加できない職員のフォローアップと同時に受講者の理解向上に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域ケア会議、研修会での交流に留まることが多い。しかしながら、近隣の地域密着型サービス事業所2か所とは互いに相談を行うような間柄である。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	介護経験や人生経験の長いスタッフが多く、傾聴や気づきに長けており、利用者は入所後早い段階で安心した生活が開始できている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族ともよく会話できており、利用に至るまでの思い、現在の思い、今後の要望から日常の世間話まで傾聴しながら関係づくりに努めている。そのため、家族との世間話は積極的に行っている。しかしながら、稀に、説明の意図が伝わらないこともある。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時の状態にもよるが、在宅が可能ようであれば小規模多機能ホームの利用を提案し、本人の負担を軽減するように努めている。また、受診のための移動が難しいときには往診等も提案し、医師と家族のコーディネートも行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者それぞれの残存能力を見極めながら、暮らしを共にするもの同士として家事の協力だけでなく、利用者相互の助け合いも行ってもらっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人と家族の絆を大切にするため、家族の支援も大切である旨を説明し、共に支えていく関係構築につとめている。そのために訪問時や電話により詳細を伝え、常に家族の一員であるという意識をもていただくよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人や家族に馴染みの場所もしくは行きたい場所を伺い、外出している。都合が合えば家族も一緒に参加していただいている。	今年度の目標の一つに個別外出を取り入れている。ふるさと訪問では自宅庭で梅やびわなど入居者に馴染みの果実を収穫し、懐かしい和菓子の購入や寿司店への外出など家族と連携しながら支援している。編み物が得意な方が入居者に靴下をプレゼントされたり、使い慣れた化粧品の継続などこれまでの生活が続けられる環境を整えている。	

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者の皆さまが参加する体操・レクリエーションを毎日行い、またカラオケなどにも参加していただき、両ユニットの方々が関わる機会を設けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期の入院により退所された方から、ご相談があり、その際すぐに入所できず、隣接する小規模多機能や他の施設を提案し小規模を利用されるかたもいる。病院や他の施設からの退所後の方に対する問い合わせにも丁寧に対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思の疎通がとれる方とは毎日の会話の中から希望や意向を聞き出している。コミュニケーションが困難な方については表情や行動から思いを推し量り、把握に努めている。	意思疎通の可能な方には普段の会話から思いを引き出し、表現困難になられた方には表情やこれまでの暮らしぶり、家族の意向からプラン作成につないでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族からの聞き取りや、情報提供書、認定調査時の情報の閲覧など、生活歴・既往歴などの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個別の機能訓練や一人ひとりにできる活動や作業を複数取組んでいただき、現有能力を把握できるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人、家族とは普段から意向を聞いている。また、家族を交えたカンファレンスを行い、現状の報告、説明を行いそれらに関する意見を頂き、介護計画に反映させている。	月のカンファレンスで個別の状況を確認し、現状を共有している。職員を入居者の担当制として、本人・家族の意向をもとに職員の日頃の気づきをプランに反映している。本人の出来る事はさせて欲しいとの意向に、体操やレクリエーションの参加を促し、趣味の編み物や縫い物が継続できる環境を整備している。2度の入院後退去された方が、再びホームに戻られ、入院中のサマリーをもとに対応しながら暫定プランを検討している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	業務日誌、個人ケース記録、カンファレンス、申し送り帳、1日2回の申し送りにて情報を共有し、介護計画の見直しや実践に生かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	現在、既存のサービスの提供にとどまっているが、姿勢調整を行う治療院を併設したので姿勢調整のサービスを提供していきたいと考えている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	運営推進会議などを通じて地域の方々からの情報もあり、地域資源についても把握している。「ささえり飽田」からの助言を受けながら、安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	特に希望がない場合には協力病院を受診しているが、希望される医療機関があれば意向の通りとしている。その際の受診については家族対応をお願いしているが、困難な場合には職員対応としている。訪問診療があることも伝えている。	本人・家族の希望を尊重し、受診へ出向いたり訪問診療を支援している。定期受診は医師との関わりを重視し、家族の対応としているが、車いす使用などで困難な場合は、送迎をホームで支援している。身体状況に応じて、受診外出から訪問診療への移行について、説明を行っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	個々の利用者に状態や受診、看護等について随時相談している。また併設している小規模多機能ホームにも看護師が在籍しているので介護職員は心強く業務ができている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	救急搬送時の手順については主治医ごとに確認している。搬送先の医師や看護師の求めに応じ十分に時間をとって情報提供を行っている。かかりつけ医や訪問診療医、看護師とは日頃より良い関係づくりに努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることができることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所契約時にも終末期についての意向確認を行い、その時点での意向確認書や同意書を頂いている。利用者の状態の変化に応じ、家族と話し合い、今後の方針をその都度確認している。それにより不安を感情についても支援できるよう努めている。	入居時に重度化・終末期に関する指針をもとにホームの取組を説明し、その時点での意向を聞き取っている。延命治療を望まない家族が多く、状態変化などその時々で気持ちを確認している。今年度家族の協力や、主治医を訪問診療可能な医師へ変更して、二名の最終を支援している。	最期に着る着物を選んでおられた家族もおられるなど、送る家族の思いが伝わってくる。今後も日頃の関わりを大切に、ホームにできる支援に努めていかれる事を期待したい。また、毎年実施しているAEDの講習が本年度はまだのようである、取組に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の連絡網であったり手順について勉強会にて確認している。新しい職員もあり、AEDの使用方法についても全職員が使用できるよう努めていきたいと考えている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災を想定した避難訓練は年2回行っている。ハザードマップ等を利用し現状における最適な方法を策定している。地域との協力体制については、運営推進会議にて相談し、助言を頂いている。	火災と水害を想定した避難訓練を年二回実施し、週1回ホーム周辺を安全チェックを兼ねて掃除を行っている。地域との協力体制については、運営推進会議の中で相談を行っている。	今後は防災業者の協力を得た訓練や、運営推進会議を利用したり、家族への参加を呼びかけ実施することも良いと思われる。備蓄についてはリストを作成して備え、職員間の共有を期待したい。以前、防災関係に携わった経験をもつ職員も在職しており、これまでの知識を今後の訓練に活かされることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者ごとの背景をしり、その方その方の人格や誇りを尊重した対応を心がけるよう求めている。プライバシーについてもきちんと保たれたケアができています。	一人ひとりのこれまでもを知り、プライバシーや尊厳に配慮した支援を心掛けている。呼称は苗字を基本としているが、会話の流れや反応などから下の名でも対応している。入浴や排泄時の同姓介助を基本とし、可能な限り応じている。身だしなみやおしゃれも大切な支援であることを全職員で共有しており、中には「眉を描いて欲しい」と要望される方もおられるようであり、女性職員が応じている。	声掛けの仕方や不適切ケアについては、本人に限らず、周りの入居者にも不快な思いをさせてしまう事もあり、今後も全職員で振り返る機会を持たれることを期待したい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常的に職員主導にならないよう心掛けており、本人の希望や快不快の感情を大切にしている。日頃より本人による自己決定を行っていただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員側の業務優先になりがちであるため、日頃より待つこと、またその方のペースを大切にしよう気を付けおり、本人の希望に沿った支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	きちんとした身だしなみは支援の基本であると考えている。本人からのお化粧の要望があるときは、好みを聞きながら対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事の準備や後片付けはできる方できない方がいらっしゃるが、できる方には調理の下準備や食器拭き等を多くのなるべく方々にお願している。ホットプレートを使い一緒に調理もしている。	食事は入居者の楽しみであることを十分理解し、開設時から季節感を取り入れた手作りの料理を提供している。職員は食材購入も3か所ほどめぐり鮮度にこだわり、魚は旨味を味わってもらえるよう可能な限り骨付きで提供しており、上手く骨を外される方もおられるようである。職員は必要な見守りや介助を行い、嚥下状態からミキサー食やとろみを個々に応じて調整している。入居者は普段の料理には関わらないが、食材の下ごしらえや食器拭き、ホットプレートを使った調理(お好み焼き・焼きそばなど)を皆で楽しむ機会を持っている。	ホームがこだわっている食材購入や専門店からの配達による茶葉の使用などについても家族へ伝える事で、更に安心につながると思われる。検食は昼食を代表者、夕食は夜勤者が行っており、今後は味や量をはじめ、今後に活かせるような感想を記録に残すことも良いと思われる。取組に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事については献立が豊富だと自負している。ベテランスタッフの栄養と見た目を考えたメニューは利用者、ご家族からも大変喜ばれている。食事量が減っている方には栄養補助ドリンクにてカロリー確保を行っている。水分については摂取量を記録し状態の確認をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	協力医院から訪問歯科診療に来ていただき、利用者だけでなくスタッフも歯科医師や歯科衛生士より説明や指導を受けている。口腔ケアは毎食後行っている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	声掛けや誘導を行うことにより排泄の失敗やおむつの使用量を減らす努力をしている。毎日の申し送りにて排泄の状況を確認し、日タトイレ介助の改善を行っている。	日中は誘導による排泄を基本としており、声掛けや自立の方の継続を支援している。日中はリハビリパンツやオムツを使用されているが、布パンツで過ごされる方が2名おられる。夜間のみポータブルトイレやオムツを使用する方もおられ、個々や時間帯に応じて排泄を支援している。また、自立の方には、プライバシーに配慮しながら、汚れの確認の必要性についても意見が出されている。トイレ掃除は、夜勤者と職員の気付きによって徹底されている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	運動や水分をきちんと摂っていただき、下剤を使わなくて済むよう努めている。下剤の量や頻度についても本人の排便の状況により調整している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	現状、時間や曜日を決めて週3回の入浴を行っている。ただし、本人の希望があればいつでも入浴を行っている。	浴室には左右に2つの浴槽が設置されており、希望や介助しやすい方で週3回の入浴支援が行われている。浴槽にゆっくり浸かることを楽しみにされている方もおられるが、シャワー浴が中心の方にはかけ湯をしながら温まってもらっている。風呂上がりは水分補給に麦茶を提供している。脱衣場や浴室は掃除が行き届き、気持ちよく入浴できる環境である。また、脱衣所には貴重品（指輪・時計・補聴器など）用小籠を用意し、紛失などがないように工夫している。	重度化も進み入浴の楽しみも異なってくることから、今後も清潔保持に加え、一人ひとりに応じた入浴支援の充実に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の希望に沿って休んでいただいている。時刻により就寝や起床の声掛けは行いが本人の意向に任せている。ただし、食後1時間以上は誤嚥の心配があるため、座位姿勢をとって頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内外用薬ともに作用副作用についての理解に努めている。処方された薬の内容や量について疑問があるときは利用者の方の一番近くにいる立場のものとして、主治医に相談するなど服薬支援に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	活気のある生活を送っていただくため、その方々の生活歴や性格を鑑みて、裁縫や業務用品作成などの細かい仕事等をお願いしている。また、いろいろな玩具等も提供し本人の状態を確認しながら変更が楽しんでいただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ご本人の要望を大切にしている。近隣へのちょっとした外出(買い物やドライブ)は頻度を高くできるよう心掛けている。外出行事に関しても同じ内容ではなく利用者の状態にあった内容で行っている。1対1での外出も行っている。	全体の外出として熊本港や花見(菖蒲・コスモス・ひまわりなど)に出かけており、コスモス見学は3か所の場所を企画し、入居者の体力や状況に応じて参加者を決定している。今年度は特に個別支援に取り組み、発せられた一言から熊本城に出かけたり、外食や和菓子店の利用、グランドゴルフへの参加、好物の菓子や飲料の買い物(大型商店や100円ショップなど)外出を支援している。また、ふるさと(菊池)の神社に行ってみたいとの要望には、家族の協力も得、神社参拝や懐かしい菓子(ゆべし)の購入、自宅に帰り仏壇まいりや、梅・びわを収穫し、ホッとされ帰宅された方もおられる。	個別の外出には特に家族の協力を得ながら取り組んでおり、継続した取組が期待される。また、車での外出が困難な方にも引き続き、敷地内の散歩など外気に触れる機会を支援いただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	外出行事の際の買い物、神社参拝、近隣店舗(100円ショップ等)への買い物の際本人に支払っていただく。受診時に飲み物を買うこともしている。利用者の方の大半の方は所持金の管理が難しく施設側で管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご本人からの要望があればすぐに対応している。日中はご家族も仕事をしているため繋がらないことが多い。ご家族にも利用者へ短時間でもよいので電話していただけるよう働きかけている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	両ユニットとも利用者の状況によりモノが置けなくなってきた状況がある。季節感のあるものを置きたいがそれが難しい状況がなため、壁面飾りをその月にあったものを飾っている。	開設当初に比べ、飾り物や花などを取り入れる事が難しくなっているが、可能な限り敷地内に咲いたものや職員が草花を持ち寄り、来訪者にも季節感を感じてもらえるようにしている。また、双方の職員が毎月、切り絵や折り紙などの製作物を壁面に掲示している。リビング食堂は開放感があり、窓側に置かれたソファに座って日光浴や庭先の花壇を眺めたり、台所からの匂いや音は食欲にもつながっている。	リビングの壁面に掲示されている外出やイベント時の写真、入居者の作品については、いつのものが日付を記すことで、家族等にもよりわかりやすくなると思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用空間は広く、またソファを増やしくつろげるスペースを多くした。利用者同士の関係性も考慮しテーブルの配置についても状況に合わせて変更している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	本人や家族で居室作りされているところもあるが、認知症の周辺症状によりシンプルな居室もある。居室のレイアウトを本人で変えている場合は危険がない限り自由に行っている。あまりにモノが散乱しているときは職員が現状に沿った整理をしている。	テーブルや3段ボックスをホームで準備しており、家族は衣類の量や種類に応じてダンスやスタンドハンガー、使い慣れた小物などを持ち込まれている。入居当初は最小限度を持ち込み、徐々に必要な品を揃えていかれる方もおられる。入居者の中には、物が多いことで不安になったり、自立歩行を妨げる場合もあり、スッキリとした居室も見られる。職員は個々の状況に応じ、居心地よく過ごせる居室作りに努めており、整理整頓や必要な品があれば家族へ依頼したり、代行にて購入を行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	歩行器、車いすを使用した場合でも移動しやすい構造になっている。トイレ内の手すりや呼び出しボタンもあり、できるところまで本人にお任せしている。難しい部分に関しては出来るようになるような支援を心がけている。		